

ヒンドゥー教の成立過程

大多和 明彦

(平成 16 年 9 月 30 日受理)

Der Prozess des Zustandekommens von dem Hinduismus

OHTAWA, Akihiko

(Received on September 30, 2004)

キーワード：ヒンドゥー教

Key words: Hinduismus

「梵我一如」, 「汝はそれである」という基本原理のもとに解脱, 悟りを求めるヒンドゥー教とは, どのような思想なのだろうか. これを理解するために, 本稿ではヒンドゥー教が成立するまでの過程を簡単に振り返り, 歴史的な見取り図を作成して, これをヒンドゥー教の基本原理を理解するための初歩的な一助としたい.

本論では, この歴史的見取り図を作成する道の途上で, リグ・ヴェーダにおける「唯一者の展開」という考え方を, ミレトスの哲人たちの考え方と比較しながら, 少し見ておくことにする. というのもこの考え方が後にヒンドゥー教の根本原理となり, そこから「梵我一如」や「汝はそれである」という基本原理が生じてくるからである.

インダス文明 bc2500~bc1500

インドにそもそも居住していた人々は, チベットやビルマ方面からきた黄色人種であったといわれる. その後ドラヴィダ族がインド北部のパンジャブ方面(インダス川上流)から侵入し, 農業牧畜社会を作り上げていたらしい. 彼らは生産力を象徴する男根を崇拜し, これが後のヒンドゥー教徒たちの「リンガ」崇拜の起源となる.

また彼らは象やイノシシや毒蛇の威力を崇め, また樹木や岩石, さらに河川にも霊が宿っていると信じていた. 要するにドラヴィダの人々の宗教は, 山川草木に霊ありとするアニミズム的な自然崇拜であったようだ.

ドラヴィダ人たちがおおよそ新石器時代から青銅器時代にかけて作り上げた農業牧畜社会, それがおおよそ前

2500年頃から1000年間の長きにわたって繁栄したインダス文明である. その都市遺跡モヘンジョ=ダロはインダス河口から約40キロの地点にある. 四本の大通りが東西南北に走り, 幅10メートルほどの広い下水道が完備, 所々マンホールももうけられている. また家々には井戸や浴室があって, 排水は下水用土管を通して大通りの本管につながっている. さらに広大な公衆浴場, その西隣には大穀物倉もある. 幾何学模様や動物模様, あるいは植物模様をびっしりと書き込んだ彩色土器や青銅器が, 東西南北のおおの約1200キロに及ぶ広大な地域から発見されている. 象形文字の刻まれた印章なども出土しているが, この文字はまだ解読されていない.

さらにインダス文明のもう一つの都市遺跡ハラッパは, パンジャブ地方にあって, 約4500メートル×2500メートルの城壁がこの都市を囲んでいる. この城壁の高さは約10メートル. 北門と西門があり, 城壁の北側からは, モヘンジョ・ダロと同様の作業所や穀物倉が発見されている.

しかしこのインダス文明はインド文化の基底をなす深い水脈となりながら, おおよそ前1500年頃, 歴史の表舞台からは消えていった. 一般にはアーリア人の侵入によってインダス文明は滅ぼされたということになっているが, 考古学的な物証はない. あるいはインダス川の氾濫が原因であったかもしれないし, 海岸隆起が原因であったのかもしれない.

アーリア人が圧倒的な支配力を発揮し始めると, ドラヴィダの文化は低俗な土着文化とみなされるようになる. しかしこれは後にアーリアの正統婆羅門を超えてヒンドゥー教が成立してくる際に, きわめて重要な役割を果たすこ

とになる。

ヴェーダ本集

自らをアーリア（高貴）と称する人々はおそらく前3000年頃には、東ヨーロッパから中央アジアにいたる草原地帯に住んでいたと考えられている。彼らは人口増加か気候変動のためか、前2000年頃四方に分散、移動し始め、その一部はシリア、パレスチナ、メソポタミア方面に進出し王国を築いた。またペルシャ地方に移住したアーリア人はイラン・アーリア人の祖先となり、アフガニスタンからパンジャブ地方に移住した人々はインド・アーリア人となった。彼らはさらにギリシャにも進出した。このためギリシャ語、イラン語、サンスクリット語等々は、文法的に同一構造を持っており、これらの言葉を話す人々はインド・ヨーロッパ語（印欧語）族といわれている。

パンジャブ地方に進出したインド・アーリア人は、一般に家父長的な大家族制のもとに農耕と牧畜の生活を営んでいた。そして、前1000年頃、危険きわまりない原始林の奥へ奥へと進出し、徐々にその文化圏の中心をインダス流域から、東のガンジス川中流地域に移していった。

彼らは自然の持つ危険な力や恵みをもたらす巨大な力を「梵」と呼び、これを神が発揮する力だと信じたようだ。そして彼らはこの巨大な力を褒め称えあるいは慰撫すべく祭壇をもうけ、そこで犠牲の獣を切り裂き、血を注ぎだし、火にかけて焼きつす儀式（供儀）を行った。

ちなみに旧約聖書の「創世記」第22章には、アブラハムがその息子イサクをモリヤの山で神の犠牲に供しようとする場面が描かれている。バビロニアからカナンまで旅をしたアブラハム一族もまた、供儀の力を信じるアーリア人だったといえよう。

ところでインド・アーリア人たちは、供儀に際して巨大な力「梵」を誉め讃える歌を歌った。この「歌詞」によって巨大な力は慰撫され、一族の安寧がはかられる、と彼らは信じたのである。また病気や災いといった有害な自然の勢力に対しては、それを抑えるべき呪いの言葉、「呪詞」を語ることによって対抗しようとした。つまり彼らは言葉が力を持ち、その言葉の力が、宇宙を動かす力と呼応すると考えたのである。そしてこの言葉が持つ力もまた「梵」と言われた。そのような力を持った言葉を集めたものが「ヴェーダ」聖典である。これらの力有

る言葉は人間が創作したものではなく、遙か昔の聖仙たちが聞き取ったものと考えられた。それ故に「ヴェーダ」は、天啓文学（シュルティ＝聴いて得たもの）といわれている。ちなみに「ヴェーダ」とは「知る」を意味するサンスクリット語 vid- から生じた言葉で、そもそも知識一般を意味するが、これが特に宇宙の秘密の力を解き明かす「宗教的な智慧」を意味するようになった。

この「宗教的な智慧」を占有していたのが婆羅門である。婆羅門とは「ブラフmana」（ブラフmanを有するもの）から転じた語で、「言葉としての力を有するもの」という意味である。もっぱら婆羅門のみがヴェーダ聖典の賛歌や呪詞を語ることができ、それ故彼らのみが「言葉としての力を有するもの」と見なされたのである。「神には二種有り、神は神であり、学識がありヴェーダに精通している婆羅門は人間的神である」（『ヒンドウーの神々』せりか書房 54頁）と述べられている。婆羅門たちは神とも見なされ、その力はこの時代には絶対的なものであったのだ。

この婆羅門が取り仕切っていた宗教、それが「バラモン教」である。それはもっぱら一族の「招福除災」を祈念する「御利益信仰」であった。我々の方で言えば「福は内、鬼は外」といったところだ。

この婆羅門僧たちが掌握していた「ヴェーダ本集」聖典は、祭式を執り行う祭官の役割に応じて4種に分類されている。

1)『リグ・ヴェーダ』（リグ＝賛歌）は、神々を祭場に勧請する役割を持つホトリ神官たちによって掌握されている。彼らがもっとも頻繁に勧請したのは、最高神、インドラ（帝釈天）であったようだ。というのも『リグ・ヴェーダ』の四分の一は、この最高神、インドラ（帝釈天）に捧げられているからだ。

インドラは、水をせき止めて悪さをする悪竜ブリトラを金剛杵と呼ばれる武器を投じて殺す武勲の神である。この神の物語の背景には、おそらくインド・アーリア人が先住のドラヴィダ人と戦った歴史が隠されているだろう。金剛杵を投げつけるインドラはアーリアの英雄、悪さをするブリトラはドラヴィダの将軍と考えられる。

インドラ神は雷帝とされているから、彼の投げつけた金剛杵は雷光を象徴するのであろう。ギリシャ・アーリア人たちの最高神ゼウス（デウス）もまた雷神であったことが、すぐにも思い出される。イラン・アーリア人の信奉するゾロアスター教の最高神アフラ・マズダも、光

りの神である。時代がずっと下ってプラトンが描く「洞窟の譬喩」の中でも、洞窟の外に燦然と輝く「善そのもの」は、太陽によって象徴されている。前3000年頃に四方に散る以前、アーリア人たちは光りもしくは雷を神の象徴として崇めていたにちがいない。

さらにホトリ神官たちは、インドラ神に次いで重要な「ヴァルナ」神を賛美した。「ヴァルナ」は宇宙全体の運行を司る「天則」(ゾロアスター教の「天則」と、人間世界の秩序の両者を維持する峻厳な司法神であり、「天則の守護者」と言われる。後にこの神は水の神とされ、後に仏教に取り入れられて「水天」となった。

『リグ・ヴェーダ』では他に、火神アグニ、風神バール、前述の武器(金剛杵)を作る工巧神トゥバシュトリ、天神ディヤウス、酒神ソーマ、死神ヤマ(仏教の説く閻魔)、河川の女神サラスパティ(弁財天)等々多くの神々が勧請されている。インド・アーリア人たちは、これらの神々に供物を捧げ、一族の安寧を祈願したようだ。

2)『サーマ・ヴェーダ』(サーマン=旋律に乗せて詠われる賛歌)は、歌詠を司るウドガートリ神官に属している。歌詞は『リグ・ヴェーダ』から採ったものがほとんどであり、これを詠う祭の旋律や音節の長短を特殊記号で示したものが「ガーナ」と呼ばれる。

3)『ヤジュル・ヴェーダ』は祭式執行担当のアドバリユ神官が掌握するもので、祭式に際して祭具、供物などに呼びかける言葉「ヤジュス」(祭詞)や祭式の順序が、散文で書かれている。

4)『アタルヴァ・ヴェーダ』は、『リグ・ヴェーダ』を筆頭とする上記三種のヴェーダとは起源を異にし、非アーリア系の土着的通俗信仰に発する招福除災の文句(呪詞・呪詛)が韻文で記されている。これはアーリア系の婆羅門階級が抱いた信仰とは異なるものである。この『アタルヴァ・ヴェーダ』は、祭式全般の監督官であるブラフマン神官の掌握する聖典で、人々は彼らの口を通して治病、戦勝、開運、豊饒等々を祈願したらしい。

ブラフマナ アーラニヤカ
梵書、森林書

以上4種のヴェーダは、「ヴェーダ本集」と呼ばれる。それぞれの本集にはのちになって①梵書、②森林書、③奥義書といった付属文献が付け加えられてくるが、一般にヴェーダというときにはこの本集を指している。

その付属文献のうち①梵書は、その名の通り「梵」

とはなんぞやという問いに答えんとする書である。祭式を執り行う際の規則および祭式の由来や意義を記しつつ、祭式とはなんぞやといった思索が展開されてくる。

梵書では、「似たものは、似たものにより生ず」という同一視、一致の思考様式が頻繁に用いられている。語源の類似をも含めて類似するもの、関係しあうものを徹底的に取り集め、それらの間に因果関係を見いだそうするのが梵書に特徴的な思考様式である。その因果関係は「これに従い、故に、これにより生ず」という思考パターンによって探求される。こうして結局、「梵に従い、ゆえに梵により生ず」ということが論証されていくのである。全て現れている個物は、宇宙の最高の潜在力、梵の顕現であると見なされるのである。梵は太初のものであるが、これが有たらんとする熱烈な欲望を起し、森羅万象が顕現したとされる。この梵の展開による森羅万象の出現という考えは、後に述べるように、すでにリグ・ヴェーダに現れているところであるが、それを梵書は上述の思考様式によって、リグ・ヴェーダのように原理を単に詩の形で提示するだけでなく、論証を伴った知識として提示したのである。

②森林書は、人里離れた森林で伝授される難解にして危険な秘儀が記されている。その思索内容は梵書から奥義書に至る中間的過程を示しており、ここで地水火風のいわゆる五大がはじめて明らかにされた。

呪術宗教世界では祭祀の秘儀を知ることが肝要であり、これら両書はそのような要請に応えんとするものであった。そこでこれら両書は知識尊重の傾向をはっきりと持つことになり、これが諸処の学術の発展をもたらすことになった。たとえば病を取り除くための祭式はいつはじめてたらよいか。これを正確に知るために天文学が発達した。また神々を勧請する祭壇を構築するためには、建築の基本となる幾何学が必要だった。正確にヴェーダ本集を読誦するために音声学の研究が開始された。ヴェーダの語法を正確に知るために文法学や韻律論が盛んに論じられた。また現世利益の典型である治病、息災に成功するためには、医学の研究が欠かせなかった。

このように①梵書と②森林書両書には、ヴェーダ本集とは異なって、知識への傾きが顕著である。ブラフマンとは何であるか、祭祀とは何であるか、という問いがここで展開され、祭儀主義から徐々に離反して、純粹思索へと向かう道が準備されてくる。しかしその問いは現世利益という実用的効果と緊密に結びつき、思索がそ

こから離れることはなかった。

ウパニシャッド
奥義書における梵我一如

「ヴェーダの究極」と呼ばれる③奥義書のうち最古のものが編纂されたのは、おおよそ前800年頃から前500年頃と考えられている。ここで展開される思索は完全に祭祀主義からは離脱し、世界の根源となっているものは何かということが、純粋な思索のうちで探求されている。奥義書の時代になると、梵はこれまで様々に考えられた他の諸原理を排除して第一原理としての位置を明確にした、さらに梵はここでもう一つの重要な原理、我と同一視されるようになる。

ちなみに我とは、そもそも呼吸するという意味で、ドイツ語の「息をする」という動詞 atmen は、我という古語の痕跡をとどめている。このように呼吸、息という意味を持つ我は、しかしここでは、万物に内在する靈妙な力、靈魂を意味している。それは、ギリシャ語ならば pneuma (霊、生命原理) である。それは一つのまとまりあるもの、閉じられたものを意味し、this one, これ、自己、自体を意味した。だからブラフマンが森羅万象となって顕現するとき、「アートマンから」顕現するという表現がなされ、この場合は「それ自体から」、「自ら」という意味になるのである。宇宙を作る強大な力、梵がそれ自体から、それ自体によって個々の存在者として顕現すると言うのである。すでに梵書に頻繁に用いられていた、語源をも含めた同一視の思考様式がここにも動き、個物に内在する我が梵と同一であると考えられるようになる。

最古の奥義書の一つ、チャンドーグヤ・ウパニシャッドにおいて、哲人シャーンデリアは、梵が我と一致することを次のように言っている。

「意を本質とし、生気を本体とし、光明をその形とし・・・一切万有を保持し、語なく、愛着もなきもの、それが心臓の内部にあるわがアートマンである。その大きさは米粒よりも、麦粒よりも・・・黍粒の核よりも微細である。しかもこの心臓の内部のわがアートマンは大地より大きく、空よりも大きく・・・これらの諸世界の全体よりも大きく・・・一切万有を保持し、語なく、愛着もなきものである。このように私の内部に存するアートマンがすなわちブラフマンなのだ。『この世を去ったのち、かならずこれと合一しよう』という意志を持つものには不安がまったくくない。」 (チャンドーグヤ・ウパニシャッド 3.14.1~4)

傍点を伏した箇所「アートマンがすなわちブラフマンなのだ」に明らかのように、ここにはっきりとアートマン即ブラフマン、梵我一如が宣言され、この一如の完成が全く不安のない状態、すなわち解脱であると述べられている。

このようにブラフマンとアートマンの二原理が同一であることを鮮明にする文章は「大文章」と言われている。大文章には以下のようなものがある。

「このアートマンはブラフマンである」

(7リグ・ヴェーダ・ウパニシャッド 2.5.19, 4.4.5)

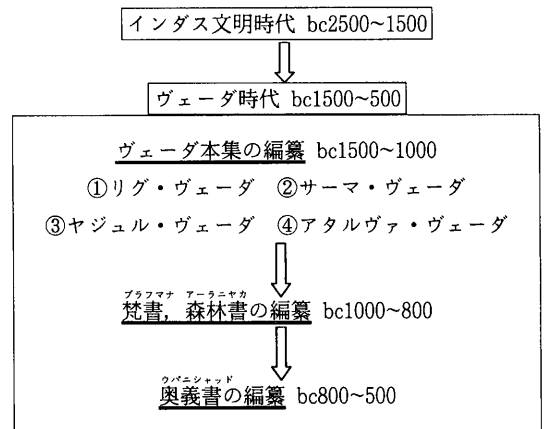
「私 (アートマン) はブラフマンである」同 1.4.10

「汝はそれ (ブラフマン) である」 Du bist Es.

(チャンドーグヤ・ウパニシャッド 4.8)

以上のように奥義書は梵我一如の原理をきわめて鮮明に提示した。しかしそこでは原理が提示されるのみで、この原理を詳しく検討して理論体系にまとめるということとはなされていない。奥義書の編纂以降歴史に登場してくる小乗仏教、大乘仏教、密教そしてヒンドゥ教は、それぞれの立場でこの原理を理論的に検証し、さらにこの原理を経験的に検証する実践体系の構築を目指すことになる。

ここで、これまでの各種ヴェーダ文献作成の時代区分を簡単に図で示しておくことにしよう。



『リグ・ヴェーダ』における「唯一者の展開」

すでに梵書にふれた際に見てきたように、全て現れている諸処の個物は、宇宙の最高の潜在力、梵の顕現であると見なされ、梵書はこのことを独特の同一視の方法によって論証しようとしていた。しかるにこのような梵書における梵の顕現という見方は、「ヴェーダ本集」のう

ちでもっとも早い時期に編纂された『リグ・ヴェーダ』のうちにすでに見いだされる。ここに記された「宇宙開闢の歌」が、梵の顕現を、「唯一物の展開」という形ですでに述べているのである。この「唯一物の展開」という考えが、後にヒンドゥー教の他の諸原理を基礎づける根本原理となるので、これについて考えておくことにしよう。その際我々は、ここで述べられる「唯一物」の考えを、ギリシャの哲人たちの考えと比較しながら見ておくことにする。

宇宙開闢の歌(リグ・ヴェーダ20・129)

そのとき(宇宙開闢の時)無もなく、有もなかった。空の世界もなく、その上の天の世界もなかった。

そのとき死も不死もなかった。夜と昼のしるしもなかった。かの唯一物は自力によって風もなく呼吸していた。これよりほかの何も存在しなかった。

始原の時、暗黒は暗黒におおわれていた。この一切はしるしのない水の波だった。空虚におおわれて現れつつあるもの、かの唯一物は、熱の力によって生まれた。

最初にかの唯一物に意欲が現れた。これは思考の第一の種子だった。

これは、太古の聖仙たちが神秘的直感の内に見取った永遠なる梵の顕現の光景なのだ、と私は思う。かれらはこの光景の出現に関して、その正しさを哲学的に証明しようとするのではなく、ただ単にそれに詩の言葉を与えたのだ。 「かの唯一物より他の何も存在しなかった」とは、聖仙たちの神秘的直感の詩的表現であるにちがいない。

宇宙開闢の時とは、厳密には宇宙開闢以前の時を指している。現代風に言い換えれば、Big Bang以前の時である。この「Big Bang以前の時」を、科学は如何にしても問題とすることはできない。しかも科学はBig Bangの事実をドップラー効果やハッブル望遠鏡によって証明できるにしても、なぜBig Bangが生じたのか、その原因については語ることはできない。科学はWhyの前に沈黙する。太古の聖仙たちは、科学が沈黙せざるを得ない「Big Bang以前の時」の有様と、Big Bangの原因を語っているのだ。

宇宙開闢以前には、空間もなければ、「昼夜」即ち時間もなかった、と聖仙たちは言う。つまりBig Bang以前には、時空は未だ成立していない。だから「無もなく、

有もなかった。・・・死もなく不死もなかった」のだ。しかし「かの唯一物」 tad ekamのみは有った、と聖仙たちは言っている。(「かの唯一物」 tad ekamを我々としてはOnly OneとかItという言葉で呼ぶことにしよう)。と言っても、かの唯一物(梵)は、我々が普通、なんらかのある物(存在者)が有るとか無いとか言う意味で、有るのではない。この意味ではかの唯一物は、無いのでもなく、有るのでもない。かの唯一物は、我々がふつつ「有る」という意味では、未だ現れていない。Itはただ動詞、isを取るのみで、未だ補語も他の動詞や目的語も取ってはいない。つまBig Bang以前には、「It is.」という状況のみがあった、ただ有るとしか言い得ない状況のみがあった、と聖仙たちは言うのだ。

この聖仙たちとそう時を隔てない頃、メソポタミア方面に移動したアーリア人のうちの一人、モーゼ(bc15c頃)は、シナイ山でインドの聖仙たちとほぼ同様の直感を得たようだ。『出エジプト記』第3章の記述では、神が彼に現れたと表現されているが、それは深い瞑想の中で彼が神を直感したということに他ならない。そのとき彼は、神をどのように直感したのか。

神はモーゼに言われた。「私はありて有るもの」。また言われた。「イスラエルの人々にこういいなさい。『私は有る』という方が、私をあなた方のところへ使わしました』と」。

モーゼにとって神は、『創世記』に述べられるように宇宙を創造した唯一者である。その神を彼は、「『私は有りて有るもの』と言うお方」もしくは『『私は有る』というお方』という風に直感している。この「I am」という一人称は神自身の語り方である。モーゼの方から言い換えれば、この言い方は「It is」ということになる。彼もまたかの唯一物を「It is」と直感しているのだ。

深く瞑想する人々は、このような、個々に存在するものがすべて消えさり、ただ純粋存在とでも言うしかない状態が現れてくるのを、等しく直感するのであろう。それは本来、言葉を持ってしてはもはや説明できない言語道断の状況なのであろう。しかし、これを何とかして言葉をもって人に伝えようとするとき、その言葉は、「It is.」であったり、「I am.」であったり、あるいは「有るのでもなく、無いのでもない」とか、「無」とか「空」とか「否、否」であったりするのである。四方に散る以

前のアリア人たちは、等しくこの深い瞑想経験を持っていたのだ。

さて『リグ・ヴェーダ』では、それにとっては時も流れず、したがって「永遠の今」のうちで、それは「自力によって風もなく呼吸していた」と言われている。聖仙たちは本来言語道断であるそれを「風もなき呼吸」のようだと表現したのだ。つまりは、それは彼らの直感においてはきわめてはっきりしてはいるが、言語にしようとするとりとめようがない、まるで「風もなき呼吸」のようだ、と聖仙たちはおもったのだ。

エーゲ海に面するトルコはミレトスの地に住んだアナクシマンドロス (bc610~546頃) にも、この直感は共通している。周知のようにアナクシマンドロスは、世界構成の基になる原理を「無規定なるもの」と表現した。この言い回しは、ウパニシャッド期の哲人ヤージニャヴァルワが梵・我一如の有様を表現しようとして「そうでもない、そうでもない」(neti, neti) と言ったのと同じである。アナクシマンドロスがこの「無規定なるもの」という言い回しで言いたかったことも、純粹存在とか、“It is” とか言われる、言語によってはとりとめようのない情況だったのだ。だからあえてこの情況を表現しようとするれば、「無規定なるもの」という表現がもっともふさわしい、と彼は考えたに違いない。この言葉によって彼は、これ以上規定しようのないもの、空間的時間的に永遠なるもの、不生不滅にして不易なるもの、無限なるもの、遍在するものを、なんとか伝えようとしたのだ。しかも彼はヨーロッパ最初の哲学書、『自然について』をきわめて荘重な讃歌という形式で書いている。つまり彼は、「無規定なるもの」を神として褒め称えたのである。この態度は、『リグ・ヴェーダ』において「宇宙開闢の歌」を歌う聖仙たちと変わらない。

さらにまたアナクシマンドロスの弟子、アナクシメネス (bc585~528頃) が、万物の根源を「空気」だと言ったのも、It が言語にしようとするとりとめようのない事態であることを、彼が直感したからに他ならない。「空気」はまさにとりとめようなく、際限なく、しかも呼吸ともなり、風ともなり、雨ともなり、雷光とも、火ともなる。不生不滅、不増不減の「空気」が一定の場所で自ら濃密化または希薄化することによって、森羅万象が生じるのだ、ということを経験して、それを何とか伝えようとしたのである。

ここで語られる「空気」は、アインシュタインが言う

エネルギーと同じだとも言えよう。アインシュタインは、宇宙に遍在する膨大なエネルギーの固まりが質量である、と相対性原理の中ではっきり言っている。E=MC² とは、言い換えれば、M=E/C² ということである。つまり質量Mは光速Cの二乗で割るほどに膨大なエネルギーEの固まりだ、とこの原理は言っている。ある重さMを持ちそれゆえある形をとった何らかのあるもの(存在者)は、形無き、重さ無きエネルギーEの凝固なのだ、とこの原理いうのである。だから私の脳を含めた心身はエネルギーの凝固体、言い換えれば、「空気」の凝固体である。死によってこの凝りがすっかりほどけてしまうとき、私の50数キロの心身(M)は宇宙エネルギー(E)にもどっていくのだ。

インドの聖仙たちはまた、「風もなき呼吸」を別様に「しるしなき水の波」とも表現している。言うまでもなくこの「水の波」という表現の仕方は、ミレトス学派の創始者、ターレスに受け継がれている。彼もまた世界構成の基になる原理を「水」としたのだった。アナクシマンドロスもアナクシメネスも、ターレスの直感を継承し、それを自らのやり方で伝えんとしたのである。インドの聖仙たちやイスラエルのモーゼの直感、遠く時と場所を隔てたミレトスの地で深く瞑想する人々にも、同じように生じたのだ。

「風もなき呼吸」もしくは「しるしなき水の波」とは、それを何らかの「波動」として聖仙たちが直感していたことを物語る。そしてこの波動はまた、かの唯一物が顕現せんとする「熱の力」とも言い換えられている。現代科学の教えるところでは、熱とは個々の原子・分子の運動エネルギーに他ならない。つまり「熱」もエネルギーの運動すなわちエネルギーの「波動」なのである。

「熱の力」は上の歌ではさらに「意欲」とも言い換えられている。意欲とは、我々が普通有るという意味では未だ顕現していないかの唯一物が、顕現せんとする意欲である。梵書において述べられていた「梵が有たらんとする熱烈な欲望」である。梵書のいう「熱烈な欲望」は、『リグ・ヴェーダ』が語るかの唯一物の「熱の力」をさしている。そして梵書のいう梵とは、『リグ・ヴェーダ』の言うかの唯一物に他ならない。

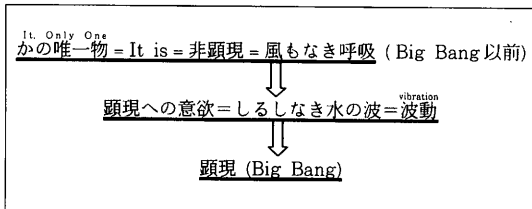
ではなぜそれは顕現せんと熱烈に意欲するのか。自己を経験して確証するためにである。

それは非顕現のままでも自己を知ってはいる。その自己知とは、即ち、宇宙の出来事に関する全知である。

つまりそれが自己を知っているとは、全てを知っているということである。しかしそれは非顕現のままでは、単なる知に止まるのである。そこで、己の知の内容を実際に経験し、自己を確証しようとするのである。これが「梵が有たらんとする熱烈な欲望」である。

こうして『リグ・ヴェーダ』ではかの唯一物、すなわち梵が自ら展開することによって世界が現出する、と述べられている。しかもこの梵の展開は自らする展開である。ここに梵書において述べられていた梵と自らの一致が何の理論的証明もなしにただ提示されている。彼らはただ、彼らの神秘的直感においてとらえられた明々白々の事態を、詩的に表現したにすぎなかった。

ここでリグ・ヴェーダに見られる唯一物の展開の過程を、図で示しておこう。



仏教時代 bc500~ad600

ヴェーダ本集の時代には、個人の靈的救いは未だ真の問題とはなっていなかった。それが問題となるのは、さらに時代を経ながらヴェーダ本集に続いて、梵書、森林書等のヴェーダ文献の付属文書が書かれ始めるころになってからである。そして梵書、森林書に次いで「ヴェーダの究極」と言われる「奥義書」が書かれる紀元前500年頃ようやく、個人の靈的救い、解脱こそが、真に探求されるべき問題として人々の意識に昇ってくることになる。

しかしこの靈的救い、解脱を求める傾向をもっとも先鋭化したのは婆羅門の後裔たちではなかった。御利益信仰の「バラモン教」を脱して、解脱・悟りを真剣に求めたのは、まず仏陀 (bc463~383) であった。「苦集滅道」を説く「四諦」と、「あるものxによってあるものyが生ずる」という「縁起」を語る仏陀の周りに、多くの人々が集まり始めた。彼らは自ら仏陀と同じく悟りの境地に入りうることを確信し、その実現を期すべく「戒定慧」の「三学」に励んだ。

アレクサンダーのマケドニア軍を追い払ってインドを統一したマウリア朝 (bc342頃~bc187頃) の頃には、多数

の仏教徒が国外にまで布教に出かけるほどに、小乗仏教はインドを風靡した。殊にアショーカ王 (bc268頃~232) は仏教を国家統治の原理となし、彼の庇護の基、第三回結集が行われた。この結集で、これまで口伝えされてきた仏陀の教えがパーリー語でまとめられ、小乗仏教經典の基礎が築かれたのである。

そしてクシャーン朝 (ad1c~3c) のカニシカ王の時代 (在位ad144?~173?) に、第4回結集が行われ、サンスクリット語で仏典が整理された。小乗仏教の一派・有部がアビダルマ哲学を展開し『大毘婆沙論』を完成させ、仏教理論の基礎が整った。

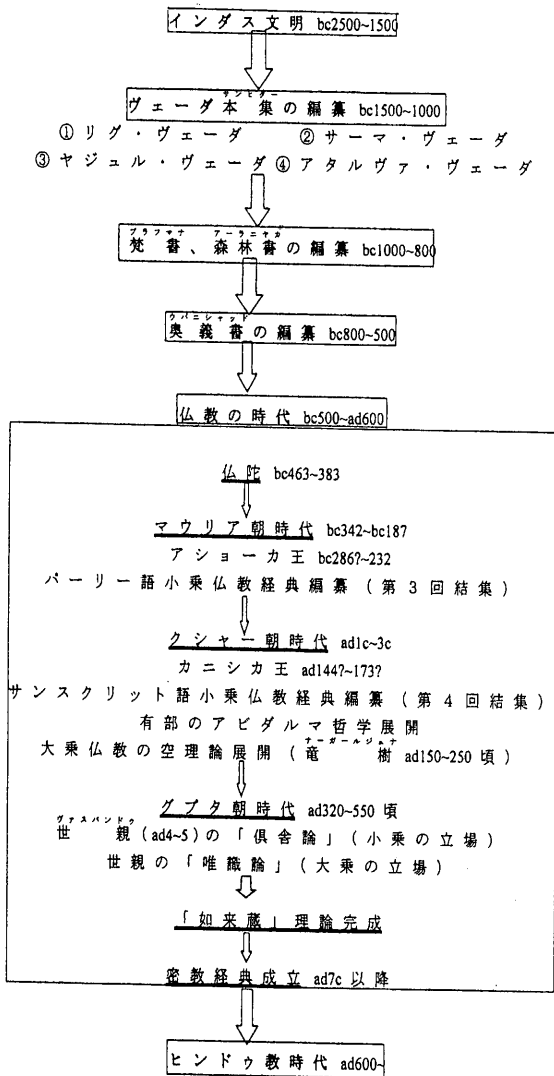
そしてこの時代に『般若経』、『法華経』、『華嚴経』、『浄土三部経』等の初期大乘經典が成立し、また仏教八宗の祖といわれる竜樹が『中論』において空理論を展開して、インド大乘仏教の空理論が固められたのである。

さらにグプタ朝 (ad320~550頃) の時代には、世親が小乗仏教の立場から全存在を「五位七十五法」によって把握する思弁を『俱舍論』として展開し、ここに仏教学の基礎理論は完成した。さらに世親はそれまでの小乗の立場を超え、竜樹の空理論に基づいて、一切は阿頼耶識の現出に他ならないとする「唯識論」を展開した。またこの時代には、煩惱におおわれた一切衆生が実は仏性を宿しているのだ、とする「如来蔵」理論が完成し、このときインド大乘仏教はいよいよ密教への頂点を目指し始めたのである。

インドで仏教が最後の光を放つのは、7世紀中葉以降に密教經典、『大日経』と『金剛頂経』が著されたときのことである。さきわめて簡単な語句を唱え、その語句の持つ力によって招福除災を願うという明咒vidyāの信仰は、言葉の持つ力を信じるヴェーダ時代から、すなわち仏教成立以前から存在した。また比較的長いサンスクリット語の文章を読誦して、諸々の障害を除く陀羅尼dhāraṇīの信仰も古くからあった。『大日経』や『金剛頂経』は、これら仏教以前のバラモン教的要素も取りこんで、明咒vidyāや陀羅尼dhāraṇīを宇宙の真理が自ら語り得る秘密の言葉として体系化したのである。ここに「五大 (地水火風空) 皆響きあり」とする真言mantraの体系化が完成した。その体系は、密教の教主、大日如来を中心として諸尊が集合する図、つまり曼荼羅としても描き出された。修行者は一定の順序でこの曼荼羅に心を集中し仏や浄土の有り様を観想しつつ、ついには自らの心の本性である清浄な光明に達するとされる。その後インド

密教は、徐々に隆盛を回復したヒンドゥ教に圧倒される。そして仏陀自身がヒンドゥの神、ヴィシュヌ神の化身と考えられるようになり、ついに仏教はインドから完全に消えていった。しかしインド仏教の最後を飾った密教は、チベットに伝えられ、さらには空海によって我が国にももたらされることになる。

以上の仏教の時代を、先のヴェーダ時代の図表に付け加えておくことにしよう。



ヒンドゥ教の時代 ad600~

ところで婆羅門の末裔たちは、この間どうしていたか。彼らは仏教思想やギリシャ思想を取りこみながら、徐々に勢いを取り戻しつつ、思索を重ねていた。その思索は後に婆羅門六派哲学となって結実することになる。それらは①サーキヤ学派、②ヨーガ派、③ヴァイシュニカ学派、④ニヤーヤ学派、⑤ミーマンサー学派、⑥ヴェーダーンタ学派と呼ばれる。

① 仏陀が亡くなってからしばらくの後、婆羅門の哲人、カピラ (bc350~250?) は宇宙が二つの構成原理から成り立つ、と考え始めていた。一つは純粹精神とよばれ、またアートマンとも言われる。ゆえに純粹精神とは我をさしている。第二の原理は根本原質と呼ばれる。これは宇宙を構成する質量因である。この二元論をうけて自在黒 (ad4c) が『サーンキヤ頌』を著し、ここにサーンキヤ学派と呼ばれる一派が生じた。「サーンキヤ」とは「数を数え上げる」という意味で、ここでは宇宙の構成原理が数え上げられたのである。そこでこの学派は「数論派」とも称せられる。『サーンキヤ頌』では宇宙を構成する原理として「二元二十五原理」(二十五諦) が数えあげられている。

『サーンキヤ頌』が説くところでは、根本原質は宇宙を構成する質量因であり、我々が先に見たアインシュタインの「宇宙エネルギー」に相当する。その根本原質には純質、激質、暗質と言われる三種の性質が数えられる。これら三要素が平衡をたもっているとき根本原質(宇宙エネルギー)は静止状態にあるが、純粹精神(我)による観照を機会因として、激質に変化が生じ、したがって性質の平衡状態が破れて根本原質(宇宙エネルギー)が展開し始めると言われる。いわば Big Bang がこのとき始まる。展開 (Big Bang) の最初に生じるのが、確認しつつ判断作用 (A is B) を行う根源的思惟機能(理性)である。これはすべての精神作用の基となるのであるが、あくまで根本原質(宇宙エネルギー)の展開したものであって、それゆえ完全に物質的なものである。根源的思惟機能(理性)とは、言うなれば、身体の一器官である脳の中の電気作用である。

次いでこの電気作用に含まれる激質がさらに展開し、自我意識、心が生じる。このときも、実は根本原質(宇宙エネルギー=It)が展開し、「It does.」が生じているにすぎないのだが、自我意識、心は、この「It does.」を「I do.」と誤認する。ここに「俺がやっている。これは

ものだ」という自己中心的な「我慢」が生じてくる。しかも自我意識は、脳内の電気作用である根源的思惟機能（理性）こそ自己がもつ本来の機能であると誤認し、さらにはこの自己と誤認した根源的思惟機能（理性）を純粹精神（我）と誤認する。根源的思惟機能（理性）＝自我意識＝純粹精神というわけだ。純粹精神が脳内にあるわけではないのだが、こうして、全ては脳内の電気作用だということにされてしまう。物質以外には何も認められなくなる徹底した物質主義が、こうして始まる。私とは物質的な「心身」だ、という強固な固定観値から、かくして人はほとんど離れることができなくなるのである。

自我意識から次いでさらにその中の激質の変化により、三要素が展開し、五つの感覚器官（眼耳鼻舌身）とそれらによる感覚作用をとりまとめる意識が生じる。また自我意識中の激質の変化は五つの行為器官（手・足・口・性器・肛門）も生じさせる。さらにこのときの激質の変化により五つの対象領域の微細要素（色声香味触）が生じ、ここから五つの感覚対象（地水火風空）が生じる。これらが普段我々が見ているいわゆる物質界を形成する。

こうして自我意識という電気作用に含まれる三要素の変化により、①眼②耳③鼻④舌⑤身、⑥意、⑦手・⑧足・⑨口・⑩性器・⑪肛門、⑫色⑬声⑭香⑮味⑯触、⑰地⑱水⑲火⑳風㉑空の二十一種が生じることになる。これに㉒自我意識、㉓根源的思惟機能、㉔根本原質、および㉕純粹精神の四種を加えれば、合計二十五原理となり、これによって根本原質の展開による宇宙の創造が説明されたことになる。

以上見たようにサーンキヤ学派によると、我々が普段見ているいわゆる物質界とそこでの我々の意識のあり方は、十重二十重の誤認に基づいている。この誤認がすなわち無知である。真実に生じているのは根本原質（宇宙エネルギー）の展開、遊戯のみである。しかるに世俗に生きる意識には、これが遊戯であることを見破ることはとうていできず、遊戯の中で、哀れ、輪廻を繰り返すことになる。

こうしてサーンキヤ学派によれば根本原質（宇宙エネルギー）が展開するかがり、生滅流転はやむことはない。展開が止滅し、それ故、自我意識や根源的思惟機能を完全に遠離して、純粹精神のみの状態となるときはじめて、日常的な動揺の一切ない絶対寂靜の神秘的境地が開かれる。本来清浄である純粹精神＝我のみとなった状態

は、生死も輪廻も解脱も、もはやなんら関係しないのである。しかるにこの純粹精神との合一はヨーガの修行によってのみ可能となる。これを実習するものはヨーギン、完成したものは牟尼と呼ばれる。

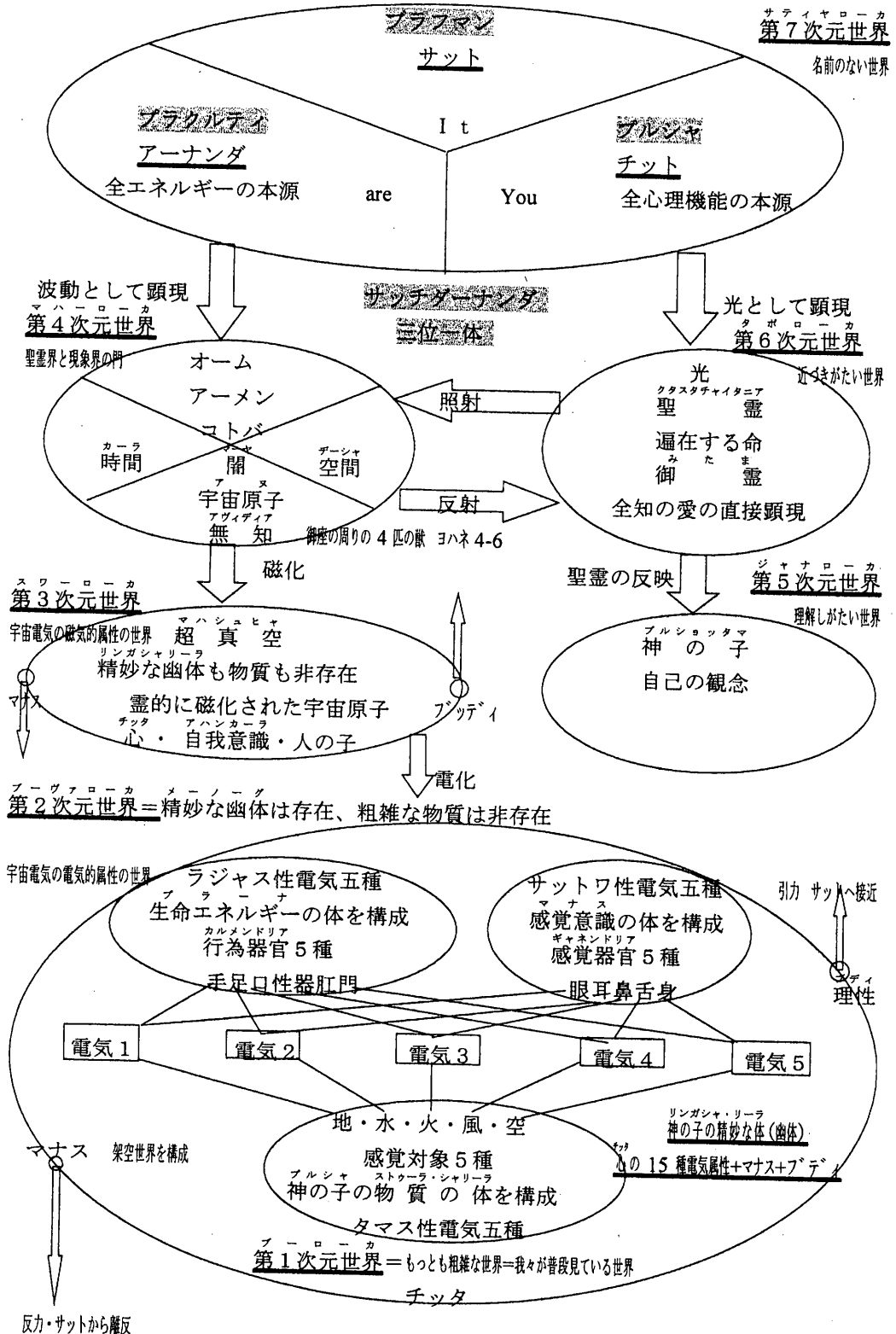
①サーンキヤ派は②ヨーガ派と表裏一体となる。

ところで現代インドの哲人、スワミ・スリ・ユクステワ（ad1855～1936）は、1949年に『聖なる科学』（1998年森北出版）という書物を著して、サーンキヤの教えと『ヨハネの黙示録』との間に根本的な一致があることを究明しようとした。かれは純粹精神と根本原質の二原理を梵の顕現ととらえ、梵、根本原質、純粹精神を三位一体と位置づけて、これがキリスト教の三位一体である「父と子と精霊」にパラレルに関係することを明らかにした。以下に示すのはスワミ・スリ・ユクステワが説く内容の概念図である。私は『聖なる科学』を理解するためにこれを作成した。この図の詳細な説明には多くの言葉が必要になる。そのためには稿を改めなければならない。そこでここでは、ただ図だけを示しておくことにする。上の説明によって、あるいはこの図がご理解いただけるかもしれない。

（図式は次頁の別図を参照）

①サーンキヤ学派によれば、以上見てきたように、この世界は根本原質の展開にすぎないのであって、いわば幻視の世界であり実在するものではない。しかるにそのサーンキヤ学派の開祖、カピラ（bc350～250?）に少し遅れる頃、カナダ（bc150～50）が出て、『ヴァイシェシカ・スートラ』を著し、世界は幻視などではなく、実在するものである、と主張した。ここから③ヴァイシェシカ学派（勝論派）が生じる。彼は、単純微細で不滅の原子が結合して複合体をなし、これが我々の感官によって知覚される場所に現実の自然世界が成立すると考えた。①サーンキヤ学派が、世界に有るものはいわば単なる名前にすぎないという唯名論の立場をとったのに対し、③ヴァイシェシカ学派（勝論派）は実在論的立場に立ったのである。

カナダを承けてブラジャスバタール（ad5c）は『句義の特質の綱要』をあらわした。バダとは言葉、アルタとは対象・意味であり、ゆえにバダアルタは「句義」という意味になる。そしてこの「句義の特質」とは存在するものの基本様態とも言うべきもので、この基本様態間の諸関係によって、世界の構造を説明しようとしたの



である。その基本様態
には次のようなものがあげられる。

- 1 実体(常住の原子)
 - ①地 ②水 ③火 ④風(宇宙に遍万)
 - ⑤空 ⑥方 ⑦時 ⑧我 ⑨意(内的感官)
- 2 属性

色, 声, 香, 味, 触, 数, 量, 苦, 楽, 識, 欲, 異等 24種
- 3 運動 上昇, 下降, 屈, 伸, 移動 5種
- 4 普遍 最高位の普遍(存在性)および, その他の普遍(例: 壺性, 土性, 実体性etc)
- 5 特殊 原子の数と等しく無数
- 6 和合 基体と属性の関係(法を持つ有法と持たれる法の関係)

これらは小乗仏教の立場にまだ立っていた世親(ad 4c~5c)が、『俱舎論』において過未現の三世にわたって実有であるとした「法体=ダルマ」と同じである。世親は一切諸法をそれぞれ独立した五位七十五法に分類し、これら諸法が働くところに煩惱が生じ、したがって苦が生じるとしたのだった。『俱舎論』はこの③ヴァイシェシカ学派の仏教版であったと言ってよい。

勝論派においてもこれら特質が相互に作用するところに物質の実体である意の働きが生じ、これが本来清浄な我におよんでその清浄さが失われるのである。そこでこのヴァイシェシカの理論をよくよく学び、さらに②ヨーガの実習に励むことによって意の働きを抑え、我と心身との結びつきが生じなくなったとき解脱が実現する、と言われている。

①サーンキヤ学派の開祖、カピラ(bc350~250?)が二原理を提示し始めた頃、口伝によって補われてきた梵書の祭式の実行規定が不明瞭になり、梵書の直接記述から祭式規定を推理する必要が生じていた。ニヤーヤとは元来「理論」、「正理」という意味であり、後に論理学研究一般をあらわす言葉となった。この推理の研究をもっぱらとしたのが④ニヤーヤ学派である。開祖はガウタマ(ad50~150頃)だが、この学派の根本経典『ニヤーヤ・ストラ』は世紀250~350年頃に作られた。

さらに梵書文献のうち祭式の細目に関する解釈を専門に⑤考査する一派が起こった。この派の開祖となったのが西暦前2世紀頃の人、ジャイミニである。彼の学説は後1世紀頃、『ミーマンサー経』となる。

また、おなじ梵書の知的考察の部分を専ら考査する一

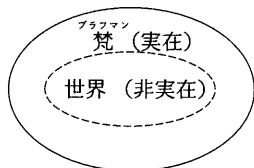
派が生じた。この学派はヴェーダの終わりを研究するものとして⑥「ヴェーダンタ」と称されてくる。この学派は①サーンキヤ学派の説くプルシャとブラクルティの二元論を激しく攻撃し、梵一元論を徹底して追求した。

この学派の祖、バーダラーヤナ(bc100~ad1)は、人間は何のために生きているのか、人生に目的はあるのかと問い、解脱こそが生きていることの目的である、と説いた。またアーシマラティア(bc3c?)は、梵が宇宙を構成する原料物質(原質)であり、それが自ら展開するところに我が生じると考え、梵と我の関係を火と火花のごとしと説いている。さらにアウドローミ(bc3c?)は、修行を積むことによって我は死後身体を脱して梵と合一すると考えた。しかるにカーシャクリツナ(bc350~250)は、生きている今そのままの我の状態のうちに梵は存在するのだと主張した。この考えでは俗のうちにそのまま聖が存在することになる。これらの先達の考えに基づき、おおよそad 400年頃にはこの学派の根本経典、『ヴェーダンタ経』が成立した。

この学派からは後世、重要な注釈家シャンカラ(ad8c)があらわれた。彼の考えによると、世俗の世界は神(梵)の幻力によって仮に現出しているにすぎず、真実中存在するのはただ梵のみである。それは不変、永遠にして部分を持たず、何らか規定されるべき属性を一切持たない。(アナクシマンドロスの「無規定なるもの」を想起せよ)それは「最高の梵」と呼ばれる。しかるにこの「最高の梵」は世界顕現のために低次の姿をとる。それが「低次の梵」といわれ、また、世界を顕現させる神イーシュバラとも言われる。世界は「最高の梵」が仮に現れた幻なのである。この考え方は仮現説と言われている。しかる人は無明におおわれて、世界が仮に現れている幻にすぎないことを見抜くことができない。真実中存在するのは唯一にして不二なる「最高の梵」のみである。第二のものたる現象世界、幻の世界は存在しない。このように説くシャンカラの説は「不二一元論」と呼ばれる。

なるほどこの世俗の世界は神(梵)の幻力によって仮に現出しているにすぎないのではあるが、それでも神(梵)の現出である限りにおいて世俗世界もまた聖なるものだ、とシャンカラは考える。つまり世俗世界はひとたび幻として否定され、人が幻を脱した瞬間、聖なるものとしてすくい取られるのである。

この事情は次のように図で示すことができよう。



実線は実在を示す
 点線は非実在を示す
 楕円は聖性を示す

死後もインド人の間に圧倒的な人気を保ち続けている
 ラーマクリシュナ (1836年～1886年) は、ジャンカラの
 言う「最高の梵」と「低次の梵」との関係を次のように
 わかりやすい言葉で語ってくれている。

「あのお方 (梵=It) が創造, 維持, 破壊をなさる (現
 出する) と見るとき, あのお方を『有要素』ブラフマン
 (低次の梵) または『根源造化力』と言う。あのお方が
 三種の要素を越えている (最高の梵) と見るとき, あ
 のお方を『無要素ブラフマン』または『超心語』なるもの
 あるいは『最高ブラフマン』という。」

さらにラーマクリシュナは不動と動と言う言葉を使っ
 て「最高の梵」と「低次の梵」との関係を次のように語っ
 ている。

「永遠不動の大実在 (最高の梵・超越) が, 変化活動
 (低次の梵・内在) するのだよ。だから私はニッテヤも
 リーラもみんな受け入れる。マーヤだからといって, こ
 の世界を除けたりしないよ。そんなことをすれば目方が
 減るもの。智者たちは, すべては夢まぼろしだと観る。
 神の信者 (バクティする人) はすべての状態を受け入れ
 るんだよ。」(『不滅の言葉』104頁)

さらに続けてラーマクリシュナは不動と動の関係を
 次のように語る。

「聖音『オーム』の説明をするのにお前たちは, 『ア
 (創造) ウ (維持) ム (破壊)』と言っているようだね。し
 かし鐘のトーンという音にたとえてみよう。『ト, オ,
 オ, ム』。

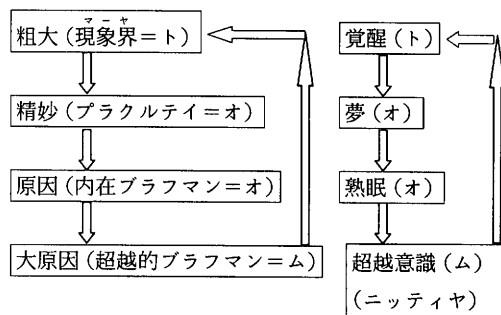
鐘を打つということは, 大海に大きなものを落として
 波が広がっていくようなものだ。リーラ (波) からニッ
 テヤ (大海) に融けこむ。粗大 (現象界=ト), 精妙 (プ
 ラクルティ=オ), 原因 (内在ブラフマン=オ) から, 大
 原因 (超越的ブラフマン=ム) に吸収される。覚醒 (ト),
 夢 (オ), 熟眠 (オ) から超越意識 (ム) に融けこむ。

ニッテヤ (ム) からリーラ (ト, オ, オ) がはじまるん
 だよ。大原因 (最高の梵・超越的ブラフマン=ム) から,
 粗大体 (現象界=ト), 精妙体 (プラクルティ=オ), 原
 因体 (低次の梵・内在ブラフマン=オ) が現れる。あの
 超越意識 (ム) (最高の梵) から, 覚醒 (ト), 夢 (オ), 熟

眠 (オ) のすべての状態が出てくるんだよ。大海の波
 (内在) は大海そのもの (超越) に溶け込む。ニッテヤ
 (ム) からリーラ (ト, オ, オ) へ。そしてリーラ (ト,
 オ, オ) からニッテヤ (ム) へ。」

(『不滅のコトバ』106頁)

このラーマクリシュナの言葉をまた図で示しておけ
 ば次のようになる。



さらにラーマクリシュナはよく詩を作って信者たちに
 聴かせていた。

相なく 性なき わが父 (最高の梵)
 いろいろに形なす わが母 (低次の梵)
 彼 (父) を讃え 此 (母) を責むるに益なし
 天秤の重さは同じ 両の皿

(『不滅の言葉』128頁)

上の詩では最高の梵と低次の梵の関係が, 父と母とい
 われている。この譬喩の仕方を彼は好んだようだ。

「無性のもの (相なく性なきわが父) が即ち一切性
 (いろいろに形なすわが母) 性。ブラフマン (父) が即ち
 ジャクティ (根源造化力=大生命力=母) だ。動かない
 ものとして考えると, それをブラフマン (父) という。
 創造し, 維持し, 破壊すると考えられるとき, それを
 根源造化力 (母) という。また宇宙の大実母, カーリー
 と呼ぶ。

ブラフマン (父) とジャクティ (母カーリー) は同じも
 の, 火と燃える力のようなもので, 一方を考えれば, も
 う一方も考えないわけにはいかない。永遠不同なもの
 (父) なしに, 無常変化 (母) を考えることはできない。
 根源造化力 (母) は常に変化活動 (遊戯) して, 創造し,
 維持し, 破壊しているかのように見える。それを, お母
 さん, 母なる神と呼ぶのだ。ブラフマン (父) であるも
 のが大実母, ジャクティなのだ。プルシャ (父) である

ものがブラクルティ(母)なのだ., 水は静かなとき(父)も水だし, 動いて波だっていて(母)も水だ. 蛇はうねって進んでいるとき(母)も蛇だし, とぐるを巻いてジツとしていて(父)も蛇だ. 永遠の大実在, またの名をブラフマン(父). またもう一つの名を時(父)という. なんと多くのものが時によって生まれ, 時によって去って行くことか, 時(父)は宇宙の大実母と交接してあらゆるものを生む. 大実母は根源造化力だ.
時と大実母. ブラフマン(父)とシャクティ(母). 不異だ.] (『不滅の言葉』200頁)

ヴィシュヌ教徒でもあったラーマクリシュナは「信愛」を何よりも重んじた人だった.

「つまり, こういうことさ. 神様に本気で惚れるということだ. . . . とにかく夢中になってあのお方(ヴィシュヌ)を呼ぶことが必要なさ. 猫の仔はただミャーミャー啼いて母さん(ヴィシュヌ)を呼ぶことだけ知っている. . . . ほかにはなにも知らない. 母さんはどこにいても, このミャーミャーという啼き声を聞けばすぐにとんできてくれる。」 (同上41頁)

修業のやり方を聴かれて, 彼は次のように教えている.
『先生, 修行の方法を教えてください.』
『方法はね, 夢中になること. つまりあのお方が大好きになること. それから祈り.』
『好きになることと祈りとどちらが先ですか.』
『神様に惚れるのが先. その次が祈り.』

(同上59頁)

しかし神様に惚れるのはどうも簡単ではなさそうだ.
「金, 名声, 五感の喜び, こういう経験をひととおりに終えた後でなければ, つまり苦楽の経験を卒業しなければ, たいていの人は神様のことに熱中できないな。」

(同上61頁)

ラーマクリシュナは, 父と言い, 母と言い, 遊戯と言い, 交接とさえも言う. これがもっとも典型的で生き生きとしたヒンドゥー教だ, と私は思う. ここには婆羅門の高踏的な態度はまったくなく, 非婆羅門的な, すなわち非アーリア的なドラヴィダ人の土俗文化のおいがふんぶんとしている. ラーマクリシュナは, ヴィシュヌ教を代表している. 母の創造力, シャクティを強調し大実母, カーリーを崇拜するところは, ヒンドゥーの密教とも言える性力派の影響も強烈である. 彼の言説が現代におけるヒンドゥー教の有様を端的に語っているのである. ついに高踏的なバラモン教は長い時間をかけて, ヴェーダ時

代には異端視されていた土俗的なドラヴィダ文化を取り込んでいったのだ. ここにヒンドゥー教が成立してきたのだ.

この高踏的なバラモン教から土俗的ヒンドゥー教への変化に大きく影響したのが, 叙事詩の編纂だった. 世紀400年頃には『マハーバーラタ』が, ほぼ現在の形にまとめられた. この叙事詩はバラタ族の軍記物語である. この中におさめられた『バガヴァッド・ギータ』は特に有名で, インド人でこれを知らない人はいない. おびただしいヒンドゥー文献の中でただ一つをあげよと言われればこの『ギータ』を上げる人が多い. この作品によって, それまで辺境におかれていた土俗的なヴィシュヌ神への信仰がヒンドゥー教の中心的な神として一躍脚光を浴びることになったのである. その始まりは次のようである.

ドリタラシュートラの長子ドゥルヨーダナはパーンドウ家の従兄弟たちの才を妬み, 亡き者にしようと企てる. 長老たちの説得も甲斐なく, 両軍合戦の時に至る. パーンドウ軍の雄アルジュナは, クリシュナ(実はヴィシュヌ神の化身)の御す戦車に乗って両軍の間に割ってはい

る.
こうしてヴィシュヌ神の化身クリシュナが, 戦うべきか戦わざるべきかと悩むアルジュナに, 自分を一切勘定に入れず勇敢に自己の本分を全うせよと諭し始めるところから, この物語は始まっている.

マハトマ・ガンジー(1869~1948)は, この『バガヴァッド・ギータ』について次のように言っている.

「私にとって『ギータ』は, 常に慰藉の源泉であった. もはや一点の光明も見いだせないとき, 私は『ギータ』を打ち開き, その都度私を慰め, 励ます詩句にであったのである. 運命の荒波が私に何一つ忌まわしい影を残さなかったのは, ひとえに, 『ギータ』の崇高な教えによるといつてよい.」

(中央公論社 完訳バガヴァッド・ギータ 267頁)

それまでの婆羅門中心文化では決して大きな位置を占めることのなかった土俗的な神ヴィシュヌ神の人気は, 『ギータ』によって絶大なものとなり, これに伴って同じく辺境におかれていたシヴァ神もまた熱烈に崇拜されるようになった. こうしてブラフマンが宇宙を創造し, ビシュヌがこれを維持し, シヴァがこれを破壊するといった三神を中心とする信仰形態が成立した. またこれら三神の配偶者サラスヴァティ(弁財天), ラクシュミー(吉祥天), ドゥルガー(突迦天)への崇拜も高まった. これ

らが今日のインドでは至る所で拝まれている。トラックの運転手は、お好みの神様のプロマイドを運転席にベタベタと貼り付けてハンドルを握っている。各派の寺院には参詣の人が絶えることはない。ガンガーの岸辺では遺体がぼんぼんと言っていいほど焼かれている。またここ

には沐浴するための多くの信者が毎日詰めかけている。こうしてヒンドゥ教は気の遠くなるほどの長い年月と、すさまじいばかりの思索の積み重ねによって、バラモン教を完全に脱し今も生き生きとインドの人々の間に生き続けているのである。

Der Hinduismus versucht die geistige Erleuchtung auf Grund von dem Prinzip, dass "Du bist Es". Um dieses Prinzip zu verstehen, suchen wir hier erstens den Prozes des Zustandekommen von dem Hinduismus. Wie ist der Hinduismus aus dem Brahmanismus zu Stande gekommen ?